

〈カナダ・トロントの図書館の多文化サービス〉

国際交流基金トロント日本文化センター図書館の実践

リリーフェルト まり子

国際交流基金トロント日本文化センター図書館（以下当センター図書館）は、1995年11月事務所開設時に併設して開設された日本情報を発信、提供する図書館である。ここでは、開設当時より携わっている主任司書の観点から、多文化社会の街のトロントにある当センター図書館の活動の実践について述べてみたいと思う。



図書館入り口

1. 国際交流基金図書館

1972年に外務省の特殊法人として発足した国際交流基金（以下基金）は、2003年に独立行政法人化された。基金では、国際文化交流事業を通じて日本に対する諸外国の理解を深め、国際相互理解を推進することを目的とし、様々な活動を行っている。基金の図書館は、日本国内には、東京四谷に「情報センターライブラリー」、埼玉県浦和市に「日本語国際センター図書館」、大阪には「関西国際センター図書館」の3ヶ所がある。また、海外18ヶ所の海外事務所にも図書館が併設されていて、主に日本文化ならびに



筆者と館内の様子

日本語に関する情報資料を収集し、サービスを提供している。

2. トロント日本文化センター図書館の概要

当センターはトロントの中心街の高級ショプの並ぶ目抜き通り、ブローア通りにあり、市の伝統建築ビルとして登録されているコロネードビルの2階にある。ここは、地下鉄のアクセスも良いたいへん便利な場所で、付近には重厚な石造りの建物に、ガラスと鉄骨の素材を用いた斬新なデザインの新館を2年前に増築し新改装オープンしたロイヤルオンタリオ博物館、カナダ最大の総合大学トロント大学、分館99館を有するメトロ・トロント・レフェレンス・ライブラリー、カナディアン・オペラハウスなど文化機関が集合するきわめて文化的な地区である。当センターには、図書館の他、約130人収容のイベントホール、2つのセミナールームと事務所からなり、講演会、展示会、映画上映会その他様々なイベントを行っている。当センター図書館は、トロント近郊から訪れる利用者に貸し出しサービスをする他、遠隔地の利用者にはインター・ライブラリー・ローンシステムを通じ、郵送サービスもおこなっている。1995年の開館当初約2,000冊だった蔵書数は、現在約16,000点にまで増えている。蔵書は英語、日本語による、人文、社会学全般を収集している。貸し出しや、レファレンスサービスの他、館内展示やイベントをとおして日本文化の発信や新規利用者の開拓に務めている。また、日本語能力試験や、講演会など当センターの事業をサポートする資料の提供も実施している。

当センター図書館のデータ

2009年4月30日現在

床面積：240平方メートル、閲覧席数30 視聴覚ブース5（ビデオ、DVD、LD、CD、カセット、TV ジャパンの視聴用）利用者コンピュータ3台（インターネット、ワープロ用）ワイヤレス環境、コピー機

蔵書数：16,000点（書籍／視聴覚資料）他 新聞、雑誌

収集言語：英語、日本語、フランス語（文学のみ）

分野：日本関連人文、社会学分野

今年は、開館14年目であり、近年インターネットの普及や利用者の活字離れなど図書館を取り巻く環境はめざましく変化した。当センター図書館は、蔵書をそろえるだけではなく、カナダに只一カ所の基金図書館として、できる限り多くの人々に日本文化の情報を発信したいと日々努力を重ねている。館内のスペースを有効に生かし、魅力的な展示やイベントを行うことにより、日頃図書館を利用しない人々が訪れる機会をつくっている。また、映像資料やマンガの導入で活字離れの若者にアピールしている。また、メディアや日本関連事業を計画している他機関に協力することで、日本紹介や理解に繋がるようなサービスを心がけている。

本稿では、当センター図書館が昨年度と今年実施してきたイベントを中心に紹介したいと思う。

3. 様々なイベント

3-1 トロント市主催行事への参加

トロント市は人口250万人を有するカナダ最大の商業都市で、年間を通じて様々な文化的でたのしいフェスティバルやイベントが、特に気候のよい5月から10月の間頻繁に行われていて、市民の生活を豊かなものになっている。

週末に行われる、市が主催する街ぐるみのイベントに参加することは、当センター図書館の存在を知らなかった人々へ図書館を紹介する絶好のチャンスとなり得る。5月23日、24日には、市内の歴史的建造物を市民に開放する、恒例の「ドアーズオープン」がある。参加機関では、それぞれ趣向をこらした展示やイベントを行う。



ドアーズオープンのイベントの時の
「ポップカルチャーコーナー」の様子

今年の「ドアーズ オープン」では、「本と建物の出会い」がテーマになっており、当センター図書館では、日本人デザイナーと建築家親子の家作りに関する館内での展示、「森に浮かぶ家」を予定している。また、トロントを

訪れた日本の小説家やトロント在住の作家による著作を蔵書の中から選び出し展示するという企画もしている。前者には、トロントにあるオンタリオ州文化施設ハーバーフロント・センターの国際作家大会（IFOA）に参加した大江健三郎、津島祐子、奥泉光、鈴木光司、多和田葉子、江國香織 他が挙げられる。また、後者には、ジョイ・コガワ、キャサリーン・ゴビエ、ケリー・サカモト、キョー・マクレア、ルイ・ウメザワ、飛鳥童 他が挙げられる。

同じく、トロント市主催の行事で、昨年10月に行われた「Nuit Blanche」（白夜）市内の文化施設を夜間から早朝まで開放する現代アートの大イベント）に当センター図書館も参加した。京都山口能装束研究所が館内に展示した「能装束展」には、夜9時まで400人以上の市民が訪れ、豪華な能装束2着、蚕から織物までの行程ディスプレイと50点あまりの装束織物サンプルに見入っていた。この展示は、能楽、伝統工芸、染色、織物などに関する蔵書資料の紹介や、図書館新規利用者開拓に効果が見られた。

3-2 源氏物語千年紀展示

昨年は、源氏物語が書かれてから千年目の年にあたり、京都市を中心に「源氏物語千年紀」記念行事が日本各地で行われた。千年紀委員会では海外での関連事業の開催を呼びかけていたこともあり、当センター図書館では世界最古の長編小説であり、日本文化の形成に様々な影響を与えた「源氏物語」をカナダの人々に広く認識してもらう事を目的に、2008年10月27日から12月19日まで、「A Millennium of Tale of Genji: Colour and the Four Seasons in Japan」と題した展示を館内で行った。



「源氏物語千年紀」の展示の様子

キュレーターには、2007年の「ロイヤルオンタリオ博物館高円宮ギャラリー」開設準備にたずさわった武末明子さんにお願いした。源氏物語には、季節の移ろいに敏感で十二単の重ねの色目をたのしむ宮廷の人々の生活が描かれていることから、色と季節をテー

マにした。当時の染色方法そのままを現代に伝えている京都の5代目染司、吉岡工房より、十二単の重ねの袖4組や、植物染色原料をお借りして、展示を行なった。また、源氏物語にあらわれる色や季節に関する和歌を英語と日本語で分かりやすく説明するパネルを作成した。京都や東京の美術館へコンタクトをとり承諾を得た上で、絵巻などのカラー複写コピーを額におさめて閲覧室で展示した。その他、当センター図書館所蔵の源氏物語関連書を並べた。この展示の企画を思い立った時点から、日本へ帰る友人に千年紀関係のパンフレット、地図、絵はがき、その他の関連グッズを集めて来てもらったりして準備をしたが、制作作業に関しても、のべ数十時間に渡るボランティアの方々が関わってくださり実現したもので、非常に感謝している。展示期間の終了時には「源氏物語千年紀」記念お茶会を裏千家淡交会トロント協会の勝谷由美子教室の皆さんの協力で行い、館内でお茶と和菓子をふるまい日本の伝統、茶道を図書館来館者に体験してもらうことができた。

展示やお茶会の参加者からは、「カナダで源氏物語千年紀の展示がみられるとは思わなかった。」「平安時代の宮廷生活をもっと知りたい。」「草木の自然染色原料は興味深い。」などのコメントを得た。お茶会に参加した、トロント在住カナダ人作家、キャサリン・ゴビエ女史が書いた千年紀に関する記事、“A truly enduring tale”が12月31日のオタワシチズン紙に掲載された。

本年5月5日には、CBC（カナダ国営放送）の1時間教養番組「アイディア」で、“The tale of Genji”が全カナダに放送された。一昨年、ドキュメンタリーメーカーのテレサ・ゴフさんが、当センター図書館を訪れた際、「源氏物語千年紀」の番組作成を促し、昨年は番組作成にあたって構想のアイディアや、またコンタクトについて助言をしたが、ついに完成し放送されたことは、無上の慶びである。番組は、当センター図書館の利用者でトロントで20年以上にわたり源氏物語を愛読している佐藤和代さんが語る源氏の魅力から始まり、オーストラリアの日本文学研究者で翻訳家のロイヤル・タイラー氏やカリフォルニア州ボモナ・カレッジ教授のリン・ミヤケ女史へのインタビューで、平安時代の愛の形や短歌、絵巻、日本美術に与えた影響についてなど専門家の見解を織り込む一方、マンガやビデオゲームなど大衆文化への

影響についてもふれていて、バラエティに富んだ興味深い内容であった。放送を聞いたカナダの一人でも多くの人たちが、「源氏物語」を読むきっかけとなる事を願う。ちなみに、CBC アイディアで2008年1月に放送された「村上春樹特集」についても、アドバイスをした経緯がある。

このように、作家やジャーナリストが日本を題材として扱いたいと当センターに様々なアドバイスを求めてやってくるが、こうしたリクエストにきめ細かく答えていくことも、当センター司書の重要な役割のひとつと考えている。こうした司書の地味な活動の中から、すばらしい小説やラジオ番組、映画、学術書が誕生するのを見ると、司書という仕事のすばらしさを改めて実感することができる。

4. マンガの人気とポップカルチャースペース

マンガはトロントでも若者を中心として幅広い読者層に大変な人気となっている。この人気は、2003年にトロントのマンガ専門書店ベガーリングの店主バークモア氏とブッチャー氏がマンガ普及のため主催したトロント・コミック・アート・フェスティバル (TCAF) の影響によるところが大きい。



トロントレファレンスライブラリーでの
TCAF

フェスティバルは隔年ごとに行われ、今年第4回目をむかえた。ドイツ、フランス、アメリカなどからも多数のマンガ家やアーティストが参加したが、日本からは「劇画漂流」で第13回手塚治虫大賞を受賞した、辰巳ヨシヒロ氏も招待された。当センターでは、TCAF 参加マンガ家、出版社、アーティスト、メディア関係者、マンガ愛好家などを招待して、5月5日にセンターのイベントホールで辰巳氏の歓迎レセプションを行なった。レセプションの開催中、図書館を開館し、今年4月に設置し開始したばかりの、ポップカルチャー発信コーナーの紹介をした。当センターでは、昨年から日本語や日本文化の入り口として1960年代以降の

マンガ家の作品を集め、貸し出しを開始した。これらのマンガはスポーツ、料理、学園もの、冒険、サイエンスフィクションなど幅広いジャンルをカバーしている。新コーナーでは、館内入り口に若者を引きつける、カラフルなソファやモダンな書架を購入し配置した。さらにそのコンテンツとして英語訳版、日本語版のマンガを増やし、ヘアスタイル、ファッション、J ポップミュージックなどの本や視聴覚を購入し、クールジャパンを全面に出すディスプレイを工夫した。

5月8日の TCAF の開幕イベントの一つは、オンタリオ州立の文化センター、ハーバーフロント・センターでの、辰巳氏と日系アメリカ人のマンガ家、エイドリアン・トミネの対談だった。300席の会場は満席となり、辰巳氏は、戦後日本の底辺に生きる人々の生活を題材にマンガを描いた背景、マンガの神様とあがめる手塚治虫に始めて会った時の感激、同時代のマンガ家との交流などをユーモア溢れる口調で語りつつ、日本のマンガ史の紹介もした。翌日、5月9日、10日の2日間に渡り、トロント・レファレンス・ライブラリーのメイン・フロアで開催されたフェスティバルには、グラフィックノベル関係出版社のブース出展やマンガ家のサイン会に訪れる人々がフロアを埋め尽くすほどの盛況ぶりだった。辰巳氏の英訳本はこれまで、モンリオールの Drawn & Quarter 社から、*Pushman*、*Good-bye* などが出版されていたが、同出版社より800ページの「劇画漂流」の英訳版、“*A Drifting Life*” がこの4月に出版されたばかりである。同書は、ニューヨークタイムズ、ロサンジェルスタイムズ、トロントスターその他の新聞に書評が載り話題沸騰である。トロント・レファレンス・ライブラリーではサインをもとめる人々が長い行列を作り、辰巳氏は一人一人にマンガを描きいれた丁寧なサインをしていた。5月8日発行のトロントの主要新聞、トロント・スター紙では、TCAF を大きく取り上げ、辰巳氏は劇画に大きな影響を与えた「グラフィックノベルのゴッドファーザー」と評されていた。

スラムダンク、ワンピース、のだめカンタービレなどを始め多くの日本のマンガが英訳され、トロント市内のマンガやアニメの専門書店はもとより、インディゴなどの大型書店チェーンでも今年あたりからマンガセクションが見られるようになった。マンガの人気は、トロント公共図書館でも取り上げ

られ、昨年4月には、トロント・レファレンス・ライブラリー(TRL)で、「Hanga to Manga: the Graphic Art of Japanese Storytelling」と題して、館内に併設されているTDギャラリーで、マンガの元祖と考えられる鳥獣戯画から浮世絵やマンガまでの一連のグラフィックノベルの展示が行われ、当センター図書館からも同展示のために貸し出しをするなど協力を行った。また、ノースヨーク・セントラルライブラリーでは、ティーン・セクションでマンガ本を収集しており、この4月にはコスプレパーティやマンガ イラストコンテストなどティーン向けのイベントを実施した。また、昨年10月には市内のコミュニティカレッジ、セネカの図書館に於いて「アニメフェスティバル」をするので、支援してほしいとの要請がセンターにあり、協力した。

5. 図書館司書・情報専門家研修参加者のネットワーク

国際交流基金では、国立国会図書館と共催で大学や機関に勤務する情報専門家を日本へ招聘し、日本情報取得の研修を行っていた。カナダからもブリティッシュ・コロンビア、ビクトリア、マニトバ、アルバータ、トロントの各大学、美術館などに勤務する司書が参加した。当センターでは、この研修に参加した司書の研修発表をかねて司書会議を数回行った。2005年の司書会議の際、お互いのネットワークをはかるため、ブリティッシュ・コロンビアの司書が管理人になりリストサーブを立ち上げる提案があり実施した。2007年からは、グーグルグループを使い、トロント大学の日本資料担当司書が管理人になり、新スタッフの紹介やそれぞれの日本関連機関の情報やお知らせなどの情報を流して連携をはかっている。昨年の8月にケベック市で国際図書館連合(IFLA)大会があったが、図書館と日本在住外国人をむすぶ「むすびめの会」からの希望者をつのり、大会終了後に当センター図書館主催でトロント図書館ツアーを行った。その際には、トロント近郊の日本関連司書のグーグル・グループ・メンバーに声をかけ協力してもらった経緯がある。日本から参加した公共図書館や大学図書館司書を対象にトロント公共図書館のオズボーン・コレクション(イギリスにおける初期児童文学研究に書かせない貴重な蔵書が網羅されている)やトロント大学チェン・ユー・タン東アジア図書館、トロント公共図書館の青少年向けサービスや多文化サービスなど

を中心にしたツアーを行った。また、カナダと日本の司書の親睦会を持ったのも、たのしい思い出である。今後とも、このような日本の司書との交流の機会があることを希望する。

以上、当センター図書館でのイベントや展示の実践を中心に述べてみた。司書は、図書館を安定的にきちんと運営していくことがまず第一の仕事であるが、その上で若者や幅広いエスニックグループ層へのアプローチ、ユーザーフレンドリーなサービスの一層の向上、魅力的なコンテンツの充実、図書館をハブとしたネットワークづくりなど新しいチャレンジが常に求められている。国際交流基金の海外図書館司書として、いかに日本に関心をもってもらえるか、正しい情報を伝えられるかを念頭に仕事をしているが、とても面白いやりがいのある仕事である。

トロントを訪れる機会があれば、国際交流基金トロント日本文化センター図書館へぜひ立ち寄っていただきたいと思う。

2009年5月20日 記

(りりーふえと まりこ。国際交流基金トロント日本文化センターライブラリー主任司書)